世界の幸せをカタチにする。
Creating Peace & Happiness for the World
Musashino University
武蔵野大学 学術機関リポジトリ
Musashino University Academic Institutional Repository

緩和ケア病棟における患者・家族にとっての意味深いケア環境の創出過程の可視化：ミューチュアル・アクションリサーチの手法を用いて

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2016-08-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 宮原, 知子 メールアドレス: 所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/246

博 士 学 位 論 文

内容の要旨及び論文審査結果の要旨

第 29 号

２０１６年３月

武蔵野大学大学院

は し が き

本号は、学位規則（昭和 28 年 4 月 1 日文部省令第 9 号）第 8 条による公表を目的として、2016 年 3 月 18 日に本学において博士の学位を授与した者の論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨を収録したものである。

※要旨番号について、通し番号の整理により以下の通り変更（2022 年 8 月 8 日）。

・変更前：第 2 号

・変更後：第 29 号

目　次

氏　名	学位記番号	学位の種類	論　文　題　目	（頁）
宮原　知子	博士甲第29号	博士（看護学）	緩和ケア病棟における患者・家族にとっての意味深いケア環境の創出過程の可視化　～ミューチュアル・アクションリサーチの手法を用いて～	･･･ 1

氏　　名	宮　原　知　子
学 位 の 種 類	博士（看護学）
学 位 記 番 号	甲第 29 号
学位授与の日付	2016 年 3 月 18 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
学 位 論 文 題 目	緩和ケア病棟における患者・家族にとっての意味深いケア環境の創出過程の可視化　～ミューチュアル・アクションリサーチの手法を用いて～
論 文 審 査 委 員	主　査　　武蔵野大学　教授 片　岡　秋　子
	副　査　　武蔵野大学　教授 草　場　ヒ　フ　ミ
	副　査　　武蔵野大学　教授 遠　藤　恵　美　子

論文内容の要旨

がん終末期にある患者とその家族が、苦悩の真っ只中にあっても、がん体験がその人にとって意味深い体験となるようなケアを提供することをめざす看護師とは、どのような看護師であり、このような看護師は、どのように創出されていくことができるであろうか。本研究目的は、がん終末期にある患者の最期が、‘患者とその家族にとって意味深い体験’となることをめざして、看護師である研究者と実践家看護師が協働し、自らが‘患者・家族にとっての意味深いケア環境’になるべく変容していく過程を探求し、その過程の可視化と、その過程に潜む推進力を明らかにすることであった。

研究デザインは、参加型の探求のパラダイムのもとで、Margaret Newman の拡張する意識としての健康の理論を枠組みとし、ひとつの緩和ケア病棟をフィールドとしたケース・スタディであった。研究フィールドに所属していた看護師である研究者は、Martha Rogers と Newman 理論を踏まえたミューチュアル・アクションリサーチ（以下、MAR）

の手法を採用し、日々の実践を担う看護師である研究参加者らと協働した。患者・家族にとって意味深いケア環境を創出すことをめざした定期的な「対話の会」を開催し、研究者と参加者らは、実践事例をもとに内省と自分たちのケアパターンの認識を奨励しあった。データは、「対話の会」の逐語録、参加者らのジャーナル、研究者のフィールドノートとジャーナルであった。分析方法は、理論を踏まえ、本研究目的に即してデータから重要な部分の意味を抽出し、変化の観点から相対的に見比べた。データ収集期間は、平成 26 年 8 月から平成 28 年 1 月であった。武蔵野大学看護学部研究倫理委員会ならびに研究施設の看護研究倫理審査会の承認を得た。

20 回におよぶ「対話の会」を通して参加者らの集合的変化は、６つの局面を経てらせん状に進化する過程として可視化された。すなわち、MAR の基本的な考え方について研究者と参加者らが合意する開始の局面から始まり(局面１)、実践事例を用いて Newman 理論の観点から‘患者の健康体験’に近づく過程の中で、参加者らのそれまでの見方や価値への‘ゆさぶり’の感覚を体験しながら、持ちこたえ、自己のケアパターンの認識をきっかけに、本理論の自己の実践への導入の可能性を吟味した(局面２)。そして、参加者らは一旦本理論を承認した(局面３) 後、さらに実践に注目し理論とのつながりを吟味しながら、MAR チームとして本理論を受け入れることを決断し、自分たちの願いをはっきりとつかみ、それに向かって動き出し始めた(局面４)。以後、より主体的に実践に本理論を取り入れ、その事例の提示と確認を繰り返しながら、率先して患者・家族にとっての豊かなケア環境としての自己になるべく挑戦し始めた(局面５)。その動きは、MAR チーム内を超え、病棟全体に波及し、そこに現れた変化を認め合う局面へと変容していった(局面６)。この過程は、参加者らの自己のケアパターン認識が重要なターニングポイントとなり変容を遂げていたことが明らかになった。

さらに、上記 6 つの局面の信憑性を確かめるために、Newman の‘全体は個の中に反映する’という主張を踏まえて、一人の参加者を取り出し、その成長の過程を詳細に調べ、参加者らの集合的な変化の過程が、この個である参加者の変化の過程に反映していることを明らかにした。さらに、参加型の AR が求められる参加者らの認識や行動の変化を明らかにするために、本 MAR の過程の終盤から、3 つの事例を取り出し、がん患者・家族にとっての豊かなケア環境として、参加者らが如何に変化したかを明らかにした。

次に、参加者らの集合的変化の過程に潜む７つの推進力を明らかにした。それらは、①参加者らと非参加者らの協働で進めるという信念、②両者の強いパートナーシップ、③自己のケアパターンの認識が自己成長に繋がるという確信、④実践事例と理論的意味づけへの強い関心、⑤模範的実践者の出現、⑥明確なビジョンの再提示、⑦わくわくするようなチーム作り、であった。

上記の結果を Guba らによる‘真実性の観点からの妥当性’の観点から考察し、さらに Newman 理論、Young の人間の進化の理論、Bohm による対話の意味、そして Barrett のパ

ワ―理論に基づき考察し、結果は支持された。

本 MAR の結果は、いちフィールドから得られたとは言え、看護師らが全体性のパラダイムに準拠した Newman 理論と看護実践のつながりに強い関心があり、忍耐強く患者・家族のケアの事例について対話を重ね、そこでの学びを実践につなげていくならば、MAR は可能であり、類似したらせん状の過程をたどりながら、参加者らは、願いの成就
に向かって拡張し変化・成長を遂げていくであろう。

論文審査結果の要旨

研究者として、また病棟の科長として、自ら豊かなケア環境としての存在として、臨床現場を変えて生きたいと抱負を語っており、質疑に対して適切に述べられている。

以上の事からにより、博士学位の授与が適当であると判定した。